

## 国際人口学会・総合研究開発機構共催「死亡と健康に関する 課題と展望」国際シンポジウム

標記のシンポジウム、英語のタイトルでは Seminar on Social and Biological Correlates of Mortality が1984年11月24日から27日まで埼玉県下と東京都において開催された。11月24日から26日までの3日間は埼玉県比企郡嵐山町所在の国立婦人教育会館にて、そして11月27日は東京の市ヶ谷の日本学会館にて行われた。このシンポジウムは、国際人口学会死亡委員会（委員長オーストラリア国立大学人口学教授 Lado T. Ruzicka 博士）が主として企画・構成、内容のプレゼンテーションを行い、総合開発研究機構（NIRA）が財政的援助と、毎日毎日の実務的運営を担当したものである。

参加者は海外から20名、日本から10名の計30名の専門家が出席した。ほかに、総合開発研究機構理事長下河辺淳氏、同理事蔵掛直忠氏、研究企画部長田中章介氏も共催者側として出席されている。海外からは、フィリピン国立大学人口研究所長で国際人口学会長の Mercedes B. Concepcion 博士、上記の Ruzicka 博士のほか、インドの S. D' Souza 博士、英国ロンドン大学の John N. Hobcraft 博士、米国デューク大学 George C. Myers 教授、ベルギーのルーバン・カソリック大学の Guillaume Wunsch 教授、国連人口部堀内四郎博士、米国センサス局国際人口センターの Eduardo E. Arriaga 博士等の日本でも有名な、死亡に関する世界のトップクラスの学者が参加された。日本からは、黒田俊夫・小林和正日本大学人口研究所教授、岡崎陽一厚生省人口問題研究所長、放射線影響研究所重松逸造博士等の専門家が出席された。

シンポジウムは次のようなプログラムに従い開催された。

第1日 11月24日（土） 午後 セッション1. 死亡率低下の停滞の原因について。同じく午後 セッション2. 死亡率の社会的、経済的要因。

第2日 11月25日（日） 午前 セッション3. 死亡率の構造とその将来展望。午後 セッション4. 危機的局面における死亡とその社会的対応。

第3日 11月26日（月） 午前 セッション5. 乳幼児の死亡と健康。午後 セッション6. 高齢者の死亡と健康。

第4日 11月27日（火） 午後 記念スピーチ。セッション7. 死亡と健康の将来展望。

日本人としては、厚生省人口問題研究所人口政策部長河野稔果がセッション3の座長を、放射線影響研究所の重松逸造博士がセッション6の座長を務めた。また、日本学会館で行われた死亡と健康の将来展望に関する特別シンポジウムには、パネリストとして黒田俊夫教授、岡崎陽一所長が、Concepcion, Ruzicka, D' Souza, L. Adekun 各博士と共に登壇された。

今回、会議は、国際人口学会としては、日本で初めてのセミナーであり、また世界の各地域（アジア、ラテンアメリカ、北米、西ヨーロッパ、東ヨーロッパ、オセアニア）からむらなく専門家を招いて行われたという点で、恐らくこれ又日本で初めての人口に関する会議であったと考えられる。

会議のアカデミックな内容について、ここで論評を加えることは差し控えるが、このシンポジウムが死亡あるいは死亡率のより洗練された計測の問題、死亡率決定要因、死亡率の年齢別・死因別構造、高齢者の死亡等について、その国際的研究の最前線、State of the art を示してくれたという意味で、とかく死亡率の人口学的、社会経済的研究が必ずしも主流でない日本の人口学界に与えたインパクトは大きいものがあったと考えられる。  
(河野稔果記)

## 中国人民大学主催「人口と開発に関する北京国際シンポジウム」

1984年12月10日から14日まで表記 (Beijing International Symposium on Population and Develop-